第07章 — 大臣の刀

01 — 儀礼館

ハヴェルが選んだのは、大臣たちが支配する人々の署名を受け取っていた儀礼館だった。高い木造天井の下に磨かれた石床が広がる。雨が南部貯水池を望むガラス壁を叩いた。下では黒い水路を水が流れ、上の壁に印刷された名前など気にしていない。

元大臣は広間の奥、暗い稽古着姿で立っていた。服の下にケーブルはない。装甲も戦術補助装置も見えない。手には木の棒、椅子の脇には質素な鞘の刀。

ロイはレイチェルと裁判所の立会人を連れて入った。救急隊員二人が出口に待機し、ヌルは広間の外に受動式記録器を置いた。その時計は施設のネットワークと独立している。風神と雷神は主扉の外に立った。二人は大臣の味方にはならないが、彼に人を傷つける能力が残っていることも忘れていなかった。

「ロイだけを呼んだ」とハヴェル。

「裁判所は証拠の保全と危害の防止を命じています」とレイチェル。「証人の前で話してください」

ハヴェルは疲れたように、しかし本心から微笑んだ。「理解していないものを、裁判所が救えるとでも？」

「なら説明しろ」とロイ。

元大臣は記録器を見た。「先に説明すれば、問いを聞く前に結論を書いてしまうだろう」

木の棒を床に当てる。柔らかな音がした。

「六年にしたのは、それ以上のものを造れなかったからだと思っているな。その思い込みがお前と私の両方を守ってきた」

02 — 老人の構え

ロイは、ハヴェルが護衛、隠した機械、政治的な圧力を使うと思っていた。元大臣自身の身体が最大の武器になるとは予測していなかった。

ハヴェルが上着を脱ぐ。腕には古い稽古の傷、指の関節は太く、一つは曲がったまま治っている。立ち姿には、長い年月をかけて傷を補いながら動いてきた人間らしさがあった。骨も神経も人工部品に置き換えず老いた人間。受動検査は心拍、呼吸、体温を確認し、人工制御信号は拾わなかった。

「年寄りの自尊心のために殴りかかる気はない」とロイ。

「なら殴るな。逮捕してみろ。私の肩に手を置け」

ロイは立会人を見た。残存資料の押収に抵抗すれば法的拘束は許されている。パージ装置の改変も認めていた。法廷へ連行する根拠は十分だった。

「同行してもらう」とロイ。

「断る」

ロイは左手を開いて近づいた。目的は手首を押さえること。打撃ではない。ハヴェルはほとんど見えないほどわずかに回転し、ロイの掌の下にあった

はずの手を上に移した。二本の指の関節が肘近くの腱に触れ、もう片方の掌が息一つ分もない距離から肋骨を打つ。

ロイの身体は、均衡を失う、内部圧力を受ける、そしてようやく手の動きを見る、という誤った順序で出来事を登録した。

老人は距離を取った。

「お前は機械を倒すことを覚えた。しかし人の前に立つことはまだ覚えていない」

03 — 沖縄の拳

ハヴェルは急がず前へ出た。両手は小さく、無駄のない軌道を描く。ロイは資料で見た沖縄空手の要素を認識した。根を張る立ち方、短い打突、盾と梃子の両方に使う前腕。しかし目の前の動きは博物館の図ではない。ロイの防御の形に合わせ、一つの動作が次の動作へ流れ込む。

ロイは筋力差を利用しようとした。ガラス壁へ押し込み、老人に退かせる。ハヴェルは脇へ滑り、前腕をロイの肩へ押し当て、人工筋と支持繊維の接合部のわずかな隙間へ拳の関節を置いた。

警告が走る。出力七十パーセント。異常負荷。繰り返せば構造破損。

ハヴェルの踵が床へ着き、腰が回り、腕を通じて圧力がロイの胸へ入った。強い攻撃と呼ぶには短すぎる動きだった。痛みはそうではなかった。

ロイは柱まで後退し、石の冷たさに手を当てた。手首のEMP装置を上げかけ、道場での無意味な閃光を思い出した。目の前には妨害すべき電子制御がない。

「その道具は、私が危険であってよいかを問い続ける」とハヴェル。「答えは永遠に出ない」

「許可を求めているわけじゃない。人を生かそうとしている」

ロイは発信器を床へ投げた。後に誰も、使わなかったのを偶然だと思わないように。

04 — 長い武器

ハヴェルは木の棒を持ち上げた。古武術の武器法を何十年も稽古した者の精度で、先端がロイの膝へ向かい、寸前で止まり、傷んだ肩へ跳ね上がった。ロイは最初の軌道を受け、次を見落としかけた。

棒の長さが間合いを支配する。ロイが内側へ入ろうとすれば傷ついた関節をさらす。反撃を準備するたびに、ハヴェルは半拍ずつリズムを変えた。

扉から見守る風神は両手を固く結んでいた。雷神は立会人の脇に立ち、一度だけ声を出した。

「急がせようとしている」

ロイは聞いた。棒を追わずに通過させ、柱の近くへ移って攻撃方向を制限した。ハヴェルは握り替え、石床へ棒の端を叩き込む。ロイの足があったタイルが砕けた。

立会人は降伏を求めた。大臣は無視した。レイチェルは救急隊員に出口を空けておくよう命じた。

「まだ止められる」とロイ。

「三十年前にも止められた。まだ止めていない」

ロイは突然身を返し、棒を柱へ挟み込んだ。今度は機械的な力の差が生きる。木が二つに折れ、破片が床に散った。

ハヴェルは折れた端を少し悲しそうに見た。

「そちらは、簡単な武器だった」

05 — 電池のない刃

大臣は刀を抜いた。

古い刀身には装飾も目立つ技術もなく、幾度も研ぎ直された跡がある。親指が当たる鍔元には黒く擦れた部分。柄の中に回路も電磁コイルも電源線も検出されない。

ハヴェルは大げさな構えを取らず、刃を二人の間に置いた。呼吸が遅くなる。初めて、指に薄い震えが走り、手首で消えるのをロイは見た。

「刀を持てば、もっと人間らしくなるつもりか」

「違う。刀を持つ身体だけを測るのを、やめさせるためだ」

刃が動いた。

ロイは何千という人間の剣術を知っている。間合い、梃子、運動量、刃の返しに要する時間。予測される斬撃の外へ動いた。刀身はコートに届かない。

それなのに何かが当たった。

左肩の布に細い裂け目が開く。鋼の刃ではなく、刃先の向こうへ集中した圧力が走ったかのようだった。続いて布の下へ乾いた衝撃。平衡装置は見えないものとの接触と誤認した。

広間の向こうで独立した音響センサーが細いパルスを記録した。カメラに飛翔体は映らない。壁の紙の掲示物は、刃が届かない場所で端から裂けた。

「何なの？」とレイチェル。

「物理的な出来事だ」とヌルの遠隔通信。「仕組みは言えない」

06 — 目に見えない刃

再び斬撃。今度はさらに離れているのに、刃の軌道に沿って床の埃が舞った。ロイが横へかわすと、圧力は胸を通過し、背後の木製壁板へ届いた。漆に細いひびが入る。

大臣は息を荒くしていた。脈が上がり、口元には年齢による震えが見える。何をしているにせよ努力が必要で、不死身になる技ではない。

ロイは次の一撃を防ぐため金属の点検板を掲げた。刀は触れない。それでも短い振動が板へ走り、手から引き剥がしかけた。次の圧力を傷んだ腕へ流さないよう、すぐ下ろした。

「空気の中に武器を隠したのか」

「そう思うか？」

「刃は届いていない。別の何かが届いている」

ハヴェルはうなずいた。「ようやく、期待ではなく観測を語り始めた」

老人が一歩踏み込む。ロイは胸の上下、足元の重心、刀の微調整を見た。計算は形になりかけて崩れた。刃の動きだけから攻撃方向を予測できない。

「発勁」とハヴェル。「古い名前だ。何を可能にするかは、まだ理解されていない」

07 — 壊れた規則

ロイは自分より強いレプリカントに有効だった手を使った。中心をフェイントで誘い、大臣の背後へ移り、腕を折らずに刀を持つ手を押さえるだけの力を出した。ハヴェルは腕の回転を許し、肩と腰を通じてその接触を別の力へ変えた。ロイ自身の動きが、右側の壊れかけた支持部を押す圧力になる。

出力七十パーセントの制限装置が突然働いた。ロイは片膝をつく。視界の端に警告。

協調低下。医療支援を求めよ。

ハヴェルは喉へ刀を向けた。刃は掌一つ分の距離で止まる。鋼が動く前に、空気の中で何かが高まりつつある。

「お前たちは百年生きられるかもしれない」とハヴェル。「そうできない者たちに、それが何を意味するか分かるか？」

「人間の寿命を短くするわけじゃない」

「人間を無意味にする」

老人の強さは鍛錬だけではなかった。ひとつの信念を磨き上げ、どんな問いも攻撃に聞こえるほどにしたことも、そこにあった。

「違う。それはあんたの恐怖だ。俺の望みじゃない」

大臣の刃が動き始めた。

08 — 人間による制止

雷神が扉を越えようとし、風神が腕をつかんだ。「今入れば、ロイが自分で選べないことの証拠にされる」

「殺されるぞ」

「なら、この人たちは何が起きたか証言する」

レイチェルが降伏を命じる。元大臣は振り向かない。目はロイから外れなかった。一瞬、権力は単純な形を取った。武器を持つ人間、傷ついたレプリカント、殺すかどうかの選択。

ロイは手を下ろした。

予想外の動作にハヴェルがためらう。その短い時間にロイは圧力の予想経路から転がるように外れ、石柱を二人の間へ入れた。見えない衝撃は柱へ当たり、古い漆喰を散らした。

ロイは柱の反対側で立ち上がり、傷んだ脚を壁で支えた。証人たちは戦闘の即時停止を求めていた。大臣にも聞こえている。

「法が刀より強いと思うか？」とハヴェル。

「違う。刀が強いときにこそ、法に意味がなくてはならない」

ハヴェルは刀を上げ、柱へ向かう。ガラスの向こうは雨の銀色の幕だった。どこかで機械式の時計が一拍飛び、再び進み始めた。

ロイは気づいた。ほかにも気づいた者がいるだろうか。